

平安時代後期の瓦

— 巴文瓦の様相について —

津々池 惣一

1. はじめに

平安時代後期の軒瓦を観察するとき多種多様な文様とともに、巴文の盛行もその大きな特徴の一つであることがあげられる。しかるに、巴文瓦を主たる対象として語られた事例は少ない。そこで、本稿では後期の多種多様な瓦文様の様相を探求する一環として、主として巴文軒丸瓦の様相の様相と盛行についての一考察を試みた。

平安時代後期の巴文軒瓦を観るとき、三巴と二巴があるが、二巴は一見して三巴に比べて極少数であることに気づく。そこで、少数であるが故に巴文軒瓦の性格・意味づけを垣間見ることができるのではないかという予想から、二巴の様相から検討してみた。ただし、巴文軒瓦の様相を検討することが主たる目的であるので、瓦当面をひろく覆うものはいうまでもなく瓦当の一部に巴文をあしらうものも対象に含めるものとする。したがって、その呼称は様々あるが巴文軒丸瓦・巴文軒平瓦の部類とする。

ところで、巴文軒丸瓦についての制作技術上の差異については以下のように取り扱うこととする。すなわち、現段階では基本的に接合式による成形で、仔細についての違いはあるものの時代を画する特異な差異は見受けられない。京都洛北の栗栖野瓦窯の調査でも「瓦当の調整方法は、工人による程度の差が認められるものの、基本的には同じである⁽¹⁾。」としている。したがって本稿では製作・調整方法からの区分を基本的には採らない。軒平瓦については半折り曲げ技法から、折り曲げ技法というのが通説のようであるが、本稿では敢えて軒丸瓦と同様に扱っていく。

次に、生産地による違いについて。まず、出土瓦について、明確には産地別に分離することが困難な事例も多い。生産地の瓦と消費地瓦の同范関係などから、一定程度比定がなされているのは周知のことであるが、本稿では産地区分が必要なものはそれに応じて明示し、それを考慮しつつ検討を行うことに努めた。その上で、全体的な傾向を探ることに努め、個々の生産地を越えた、当該期の全体的な趨勢を示すものを抽出することを目的とした。

また、河内・山城産の瓦以外についての巴文の出現・盛行については既成の編年観にしたがって論を進めた。河内・山城産についてのそれは、本稿での内容で触れていく。以下、各地の瓦生産地についての通説を概観してみる。播磨産の平安時代後期の瓦生産は法勝寺創建時の11世紀後半頃からはじまるとされている。巴文については、神出窯の宮の裏・釜の口両支群の中に三巴文軒丸・軒平瓦を認める。目下のところ12世紀中葉以降に出現するとされている。大和産については、後期の瓦では11世紀中葉頃から12世紀前半にかけて蓮華文軒丸瓦、唐草文軒平瓦が中心であ

るが、12世紀中頃から、巴文軒丸瓦・宝相華文軒平瓦が中心となる。丹波産は王子瓦窯を中心に生産され、11世紀の前半、法成寺造営頃から開始され11世紀後半に活発化して12世紀中葉には操業を停止するという。巴文は12世紀前半期であるとされる。讃岐産瓦は11世紀後葉には鳥羽離宮などの造営を契機に西村窯などで本格化して、12世紀にはますえ畑窯などで生産が活発化し、11世紀後葉～12世紀前半は蓮華文軒丸瓦と唐草文軒平瓦が中心で、中葉には巴文軒丸瓦、宝相華文軒平瓦、連巴文軒平瓦が見られるという。尾張産瓦は12世紀前半は、蓮華文軒丸瓦と宝相華文、唐草文軒平瓦が中心であるが、12世紀中葉から巴文が見られるという。したがって、山城、河内産以外の各地の巴文の様相は、目下のところ12世紀前半期を一部含めて12世紀中葉以降に盛行するということであり⁽²⁾、今回はそれを前提に論を進める。

2. 法勝寺跡の二巴軒瓦 (図1)

まず、時期的に六勝寺の中で、一番古い瓦を含むと想定される法勝寺跡の二巴文を検討したいが、その前に、巴文出現前の様相を確認しておきたい。巴文出現直前の様相を確実に示すと考えられる資料としては、推定法勝寺金堂下層遺跡の瓦を含む遺物群がそれを示していると考えられている⁽³⁾。この調査例では巴文は検出されていない。したがって、現段階ではこの時期、すなわち11世紀の中葉以前には確実に巴文は登場していないと言えよう。

さて、二巴文をあしらって法勝寺跡に見られるものには、いわゆる複弁六葉軒丸瓦があるが、中房内に二巴を配する軒丸瓦⁽⁴⁾ (図1-1・3・4)と外区に珠文を巡らす二巴文軒丸瓦⁽⁵⁾ (図1-6)、それに中心飾りに二巴文を置き左右に剣頭文を配する軒平瓦⁽⁶⁾ (図1-11)がある。前者の瓦、すなわちこの河内産軒丸瓦は宇治平等院、醍醐大智院その他で出土している。六勝寺では、

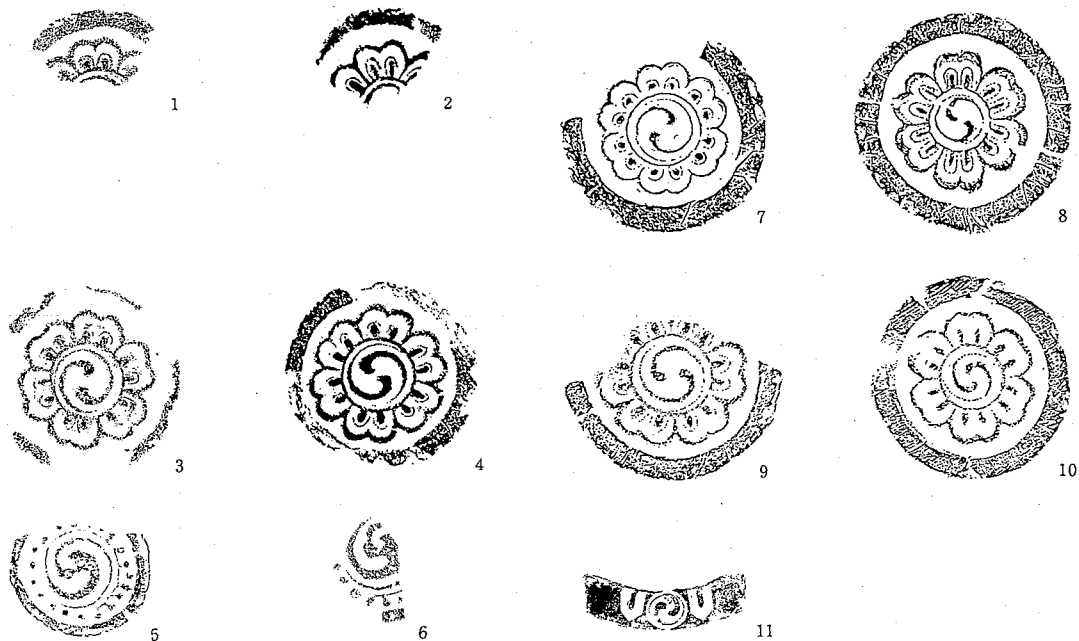


図1 法勝寺の二巴文軒瓦と同文瓦 (1:6)

法勝寺跡・円勝寺跡に見られる瓦で、いままでに12世紀後半から12世紀末とされていた⁽⁷⁾瓦である。

ところで、この二巴文瓦の編年観は杉本宏氏によって提起されている⁽⁸⁾。まず中房が大きめで、子葉の周りに圏線の有るもの(図1-7・9)から、中房が小さめになるもの(図1-8)へ、そして子葉の周りの圏線も無くなるもの(図1-9)へと変化していくとしている。また、中房内に三巴をあしらうものは「(図1-7・9)からの派生と考えられる」とされており、また二巴文に対して「後発傾向」があることを示唆されていた⁽⁹⁾。これらの年代観によれば、平等院小御所(1080年頃)に見られるものでおおむね11世紀後半、醍醐大智院に見られるもの(1100年頃)で11世紀末から12世紀初頭、平等院鳳凰堂に見られるもの(1110年頃)で、12世紀初頭から生産を開始し、中葉まで主要な形式となっていたとされている。すなわち、古い様相は11世紀後半(第4四半期)に遡るとされ、以降12世紀前半期を通して同意匠の文様が盛行するという。現段階ではこの見解が一番整合性をもつと考えられるので、この二巴文瓦については杉本氏の見解を前提に論を進める。

さてこの前提に立つなら、法勝寺跡出土の二巴文瓦は大きめの中房に二巴を置き、周囲に複弁蓮華文を配するが子葉に圏線を付ける特徴を持つもので、この意匠の瓦では古い様相を示している。それ故、この推定法勝寺跡瓦は、創建瓦の可能性を含めた11世紀の第4四半期から12世紀初頭に属するものといえる。以上の前提に立つならば、巴文の登場時期については、この段階では、法勝寺創建期瓦の可能性を含めて11世紀の第4四半期まで遡れると考える。一方、同意匠の瓦は円勝寺推定地でも出土(図1-2)している。法勝寺の瓦は既述したが、円勝寺の瓦は、同意匠とはいうものの複弁が長めのもので圏線はつくが中房については小さめであり、大智院(1102年創建)の瓦以降の様相を示している。

ところで同じく二巴文をあしらうが、左巻きの巴文で外区に珠文を配するもの⁽¹⁰⁾がある(図1-6)。これは、法勝寺跡のみではなく、同文と思われる軒瓦が尊勝寺阿弥陀堂跡⁽¹¹⁾に見いだせる(図1-5)。そうであれば、両寺の創建の時期差から考えてこの二巴文瓦は法勝寺の創建に係わる瓦ではないと解釈して差支えなかろう。また、尊勝寺より後発の建立寺院跡では目下のところ同範瓦を知らない。したがって、尊勝寺創建時よりあまり遡らない時期に使用された可能性を含めて、それ以降には、一定期間この種の二巴文が存在すると考えられる。また、二巴を中心飾りに置く軒平瓦⁽¹²⁾(図1-11)については、文様の様相などから今後その他の六勝寺関係の調査で出土する可能性が高いと思われるので、現段階では前述の二巴文軒丸瓦より下るものとして扱う。

3. 尊勝寺、その他の二巴軒瓦(図2)

ところが、尊勝寺で出土する瓦で、二巴を配するものはその他にもいくつかある。図2-1・2のものは、尊勝寺金堂推定地からのもの⁽¹³⁾で、1のものは同報告書のP L 38-114のもので、右巻きで18個の珠文を配し、径15.0cmを測る。2のものは同じくP L 38-116のもので、右巻きで24個の珠文を配し、径13.3cmを測る。図2-3は、武徳殿内を調査したときのもの⁽¹⁴⁾で、右巻きの巴文で17個以上の珠文を配し、径13.8cmを測る。図2-4①②は、尊勝寺西塔推定地からのもの⁽¹⁵⁾で、

同調査例の報告書の図6-14・17が該当する。右巻きの珠文を配した巴文である。図2-5の尊勝寺観音堂推定地からの⁽¹⁶⁾瓦と同文様と思われる。5・の瓦は、右巻きで24個の珠文を配し、径13.2cmを測る。図2-6は、5と同調査地からの出土である。右巻きの巴で珠文は21個である。径13.6cmを測る。その他にも、出土しているものと思われるが、いずれにしても二巴

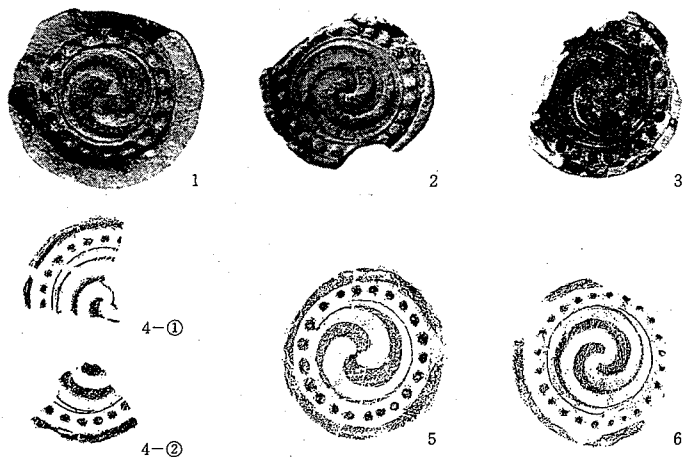


図2 尊勝寺二巴文軒丸瓦(1:6)

文は多くはないが確実に尊勝寺の時代に存在しているといえよう。

一方、尊勝寺創建以降の寺院にあっては、二巴文は軒平瓦に一定程度みられるものの、基本的には、尊勝寺と同程度もしくはそれより少なくなる傾向がある。

・最勝寺。1118年(元永元年)始め頃造営開始、12月供養。1991年度の調査事例⁽¹⁷⁾で検討した。この調査では、最勝寺そのものの遺構は検出されていないが、調査区南西部で最勝寺の東限溝と考えられる南北溝が検出されている。その後の立会調査でも同じ溝は追認されている。同じ調査地内の東側で、大量の瓦が出土した。東西方向の溝を中心に出土した瓦を最勝寺の廃棄瓦として扱ってみた。ここでは軒丸瓦で総数は382点を数える。そのうち三巴文のものは39点で、不明の巴文は42点である。二巴文はわずか1個体で、軒平瓦には一定度見られる。

・円勝寺。1125年(天治2年)に木作始があり、1128年(大治3年)供養。1970年の調査事例⁽¹⁸⁾で検討した。瓦は調査区の北西部で検出した瓦溜から出土したものという。軒瓦は342点で、軒丸瓦は202点、軒平瓦は140点を数える。三巴文は軒丸瓦で22点、軒平瓦で1点であるが、二巴文は河内系の軒丸瓦1点を除いては、皆無である。ただし、円勝寺出土とされていた瓦は法勝寺創建瓦を投棄したものという論⁽¹⁹⁾もあり、今後の調査の推移によっては異なる展開も予想される。

・法金剛院。1130年(大治5年)供養。1968年の法金剛院境内の調査で検出された瓦群⁽²⁰⁾を対象とした。この地は天安寺の比定地でもあり、また現在まで存続していることを考慮する必要がある。しかし、この時の調査では、二巴文の軒瓦は見当たらない。

・成勝寺。1139年(保延5年)創建。成勝寺の西に隣接する関連資料として扱う⁽²¹⁾。軒瓦は594点出土している。そのうち、軒丸瓦は285点で18点が巴文をあしらう。そのうち二巴は3点で三巴は15点である。軒平瓦は274点で、巴文は7点である。そのうち1点が二巴で6点は三巴である。

このことは、法勝寺創建から尊勝寺創建までの時代には二巴文の瓦は、絶対数もごく少なかったということ。また、後発の建立寺院で二巴が少ない傾向を示しているということは、尊勝寺の創建以降、あまり時期を置かずして、三巴が二巴に取って替ったと考えられるのではないか。そ

れ故、鳥羽南殿⁽²²⁾（1086年造営開始）、や白川南殿⁽²³⁾（1095年）、円宗寺⁽²⁴⁾（1070年供養）などで、註22・23・24で列挙した調査事例で二巴文が出土していないのは、もともと採用しなかったとも考えられるが、むしろあったとしても極少数であったが故に現段階で未検出であると考えられる。

4. 尊勝寺とそれ以降の巴文瓦の傾向

次に尊勝寺創建以降の巴文瓦の様相を考察してみる。1102年創建時から、六勝寺の多くが倒壊したという1185年（文治元年）の大地震迄の様相の一つを示す尊勝寺瓦を含めて検討してみる。ただし、堂宇による瓦の葺きかたの差異を一定考慮する必要もある。瓦の出土特徴については、各々の寺院だけではなく堂宇による違いでも瓦の文様に大きな差異があるのは平安時代後期には通有のこととされている。そうであれば、事例の対象によれば特定の傾向が出てしまうのではないかという懸念が生じる。これを、払拭するためには供給地の異なる可能性がより高くなる、複数の寺院もしくは堂宇を検討する必要がある。

・尊勝寺金堂跡⁽²⁵⁾。巴文の総数は軒丸瓦の総数164種541個体内の47種103個体。二巴は5種15個体、朱文等のある三巴は23種46個体（四巴を3個体含む）、朱文の無いものは9種22個体、不明なものは10種13個体である。

・尊勝寺観音堂⁽²⁶⁾。京都府の調査例では個体数の明示があり、二巴は巴文15個体のうち11点、73%に及ぶ。朱文の無い巴文は未検出である。逆に六勝寺研究会の調査例では、個体数の明示はないが二巴は未検出である。三巴は朱文有りのものが5型式、無いものが1型式である。両調査例は個々では検討し難いので、両例の形式数での比率を出した。その結果は、巴文21種のうち二巴17%、朱文のある三巴75%、朱文無しの三巴8%である。

・醍醐大智院。康和4年（1102年）建立。創建当時、桧皮葺であったという記事が「醍醐雑事記」にあることに依拠して報告書⁽²⁷⁾では12世紀末から13世紀初頭に比定している。しかし、葺瓦として用いていた可能性もあることを想定したものとして取り扱う⁽²⁸⁾。出土瓦は軒丸瓦23種97点、軒平瓦106点である。軒丸瓦では、二巴をあしらった軒丸瓦が25%を占め、三巴を含めていわゆる巴文が全体の半数を占めるという。個体数は不明であるが、外区に朱文を配するものとそうでないものの割合は半々である。二巴も含めた割合では30%均等に近い比率を各々示す。また、若干の例外（尊勝寺西塔跡⁽²⁹⁾）はあるが、1102年から建立開始の尊勝寺期の巴文の様相は、概ね二巴が10%からせいぜい25%まで、朱文有りの三巴は60%から70%程で、朱文無しの巴は確実に朱文有りのものより少ない。

また、12世紀中葉に比定されているいわゆる楕円形軒丸瓦がある。上原氏の見解⁽³⁰⁾では、巴文は楕円形瓦に後続する小型軒丸瓦に圧倒的に多く、時期的にも12世紀後半代に盛行するとされている。同じ調査事例を上原氏の計測方法に沿って二巴をグループングしてみると、上原氏調査事例の内、鳥羽南殿には二巴文は見られず、円勝寺には1種見られ⁽³¹⁾、尊勝寺例には2種ある⁽³²⁾が、その二巴はSグループに属さず、MSやMグループに属す。この傾向は他の事例でも認められる⁽³³⁾ので、二巴は楕円形軒丸瓦にやや先行するのではないか。また三巴は楕円形瓦と平行もしくはそれ以降

に盛行する文様ともいえよう。ただし、その他の調査事例では二巴瓦でも、Sグループに属するものがある程度存在する⁽³⁴⁾のも事実である。これは、上原氏のグルーピングの中に特殊堂宇についての瓦がSグループの中に混入している可能性もあり、その点を考慮すれば大きな問題は生じないはずである。

次に、12世紀の中葉以降の様相を示す巴文瓦の出土状況を見る。

・鳥羽金鋼心院釈迦堂⁽³⁵⁾。1154年（久寿元年）供養。総固体数について、報告では不明瞭であり、註35の概報の限りでの比率を求めた。巴文は、二巴をあしらうものがなく、朱文のある三巴文が20%（四巴を一種類含む）で、朱文の無い三巴は80%を占める。

・醍醐栢杜八角円堂⁽³⁶⁾。1155年（久寿2年）供養。創建時には桧皮葺であったという。軒丸瓦は14形式88個で、その内11形式は巴文で72%を占める。ほとんどが珠文の無い三巴という。

ここで揚げた例は、確実に12世紀の中葉以降の様相の反映を示すものである。基本基調は二巴をあしらうものが皆無となるということと、珠文の無い三巴が大勢を占めるという様相が見て取れる。また、三巴の文様自体も極めて雑なものが多く、これは平安時代後期から末期にかけての巴文の趨勢を示しているのではなかろうか？

5. 小結

巴文をあしらった瓦は確実に平等院・法勝寺に見られるように河内産の瓦を中心に、また、おそらく少数かと思われるが京都産の瓦に現われること。11世紀の第4四半期頃であろう。尊勝寺期に代表される二巴文の如く、創建後の早い時期に、絶対量は少量かもしれないが二巴の盛行を見て取れる。これより若干遅れるか平行して、珠文を伴う三巴文が一挙的に現われだしたと考えられる。そして12世紀中葉以降になると珠文無しの巴文が確実に増加することを示している。

6. 平安時代後期における巴文の採用・盛行の要因

以上のような様相を示す巴文であるが、平安時代後期の勃発的ともいえる盛行は何に起因するのであろうか。巴文の起源には諸説あるものの⁽³⁷⁾、それとは別にこの時代特有の事由があるのではなかろうか。とすればその事由とは何であらうか！？

ところで、平安時代後期の瓦を観察するとき、巴文の他にも特異な瓦として、法具や文字あるいは、石塔をあしらった瓦が一定数見られる。具体的には、法具をあしらった瓦に三鈷杵（図3-8）や羯磨（図3-6）を文様としているものがある。文字をあしらったものには、梵字（図3-5・7・10）や「南無阿弥陀仏」（図3-9）などを描いた瓦などがある。また、宝塔（図3-4）や五輪塔（図3-3）そのものを示すものもある。さらには、仏像そのものを描いた軒瓦（図3-1・2）もある。これらの文様は当時にとっては密教を特徴付ける具体的表現であることを示している。一方、巴文は具体的な対象物が見い出せない。あるがままの文様それ自体では直接的にはその関連を理解できない。唐草文からの派生とする見方もあるようだが、文様変化からの自然発生的な生成文様だとしても、特定の製作意義を見出すことなくしては、盛行に

は結びつかないのではなからうか。そこで、当時の密教などの様相を概観することにより、何らかの関連性の有無を検討してみる。

まず、当時の密教の様相はどのようなものであったのかを概観してみる。それは、おそらく、陰陽道や道教も混入して、混在一体となしていたと考えられる。奈良仏教が鎮護国家宗教であったのに対して、平安密教は当初の鎮護国家のそれから、現世利益を求めることに重きを置く「貴族仏教」とでもいうべき性格に変わった。すなわち特権貴族たちは密教の加持祈祷に現世利益を期待し、そこに潜入した陰陽道にも依拠して日時・方角などの吉凶を占うなどの生活を送っていた。

平安時代後期、時あたかも末法思想の広まりの中で、とりわけ末法の時代に入るとされた1052（永承7）年前後は、急速に現世に不安を感じる人々の間に阿弥陀仏を信仰し阿弥陀如来の住む西方極楽浄土への往生を願う浄土教の教えも広まりつつあった時代であった。特権貴族は競って現世に極楽浄土を得ようとして抗った。このような時代のなかで、密教や陰陽道なども広く深く、院政期の特権貴族の中に浸透していったと思われる。しかし、如何に阿弥陀堂を築き現世の幸福と利益を得ようとして、なおかつ現世に極楽浄土を手に入れようとするも、末法思想に染まった彼らは、けっして不安や恐れから開放されなかったと思われる。それ故、一方で現世に極楽浄土と、他方に旧態依然たる現世利益の追求と陰陽道などにもとずく、日々の吉凶に一喜一憂、戦々競々とした日々を送っていたに相違ない。そのような中で、阿弥陀堂を建てるとか、屋根に文字瓦やその他リアルな文様の瓦を葺くなどの行為は何を意図したものなのか。それは、仏教、なかんずく密教に対する自己の信仰心の帰依する深さの具体的表現を示そうとしたとも思われる。観念上の極楽浄土をあたかも現実に得ようとする意思表示、すなわち安心感を得るという行為であると考えられる。

以上の視点にたつて再度巴文瓦を捉えるならば、巴文もなんらかの密教的捉え方で解釈できるのではないか。輪宝（図4-1）そのものを表現した瓦もある（図4-2・3）が、初現期に近いと思われる瓦に簡略化された輪宝状文様をあしらひ、中央に巴を配しているもの（図4-5・7・9）は両文様をセットのものとして解釈できるのではないか。すなわち、剣菱文の中に巴をあしらう、いわゆる剣巴文の軒丸瓦も同類に解釈できる。すなわち、剣菱文などといわれているものは軒丸瓦に巴文を描き外区あるいは周縁を車輪の枠と見立てて、輪宝と呼ばれている密教法

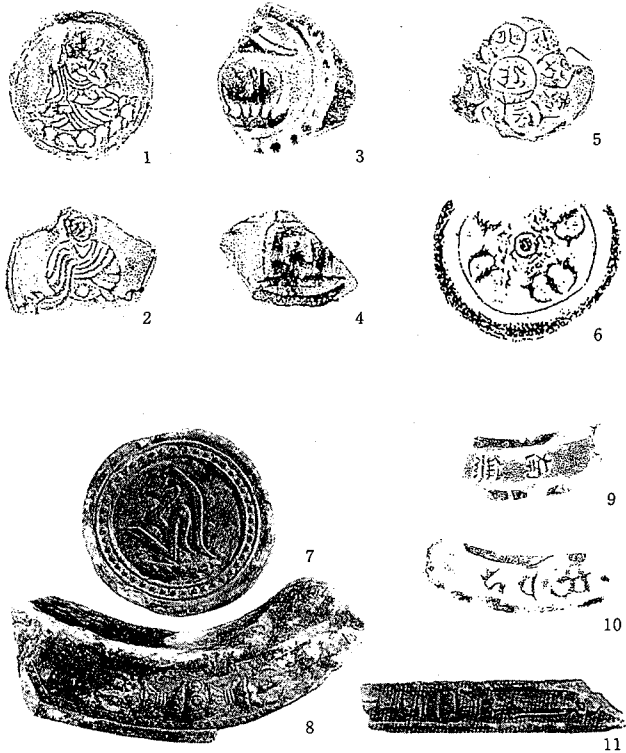


図3 密教関係の瓦（1：6）

具を簡略化したものと解釈できるのではないか。そして、中房に巴を配しているのは輪宝の密教的性格からして廻転（渦巻き）を象徴する文様としては考えられないか？⁽³⁸⁾そして、この文様は時間的推移をそれほど経ることなしに、中央部に巴文を配し、周囲に剣頭文を配したもの（図4-5・7・9）は、巴文軒丸瓦と剣頭文の軒平瓦へと分離して、なおかつセットとして平安時代後期を飾るようになったと解釈できないだろうか。その時点で、巴文はそれ自体が廻転の象徴として輪宝を意味する簡略化した文様に転化したと考える。

これに対して平安期の前期、すでに密教が日本へ伝播していた時期、密教との関連意匠であるとするなら、同時期の絵画その他の意匠に巴文が見られないということで疑問視する指摘がある。これに対しては、日本でこの時期同意匠が見いだせなくとも、密教はすでに流入していたのは事実であり、そうであれば、唐草文様の簡略化されたものから、巴文の回転性を意識し、そこに輪宝を類推するなどして自発的に生成・発展したとしても不思議ではない。

また、朝鮮半島に新羅時代とされる巴文が「感恩寺」などにあるという。しかし、新羅時代と想定されているとはいえ伝播した根拠は定かでない。また、仮にそうだとした場合、その例は極少数であり当時それが日本に流入してその結果、盛行したとは断定しがたい。いずれにしても現段階では、日本において流行する思潮的背景と条件性が備わっていたと解釈するほうが妥当であろう。

7. まとめにかえて — 巴文—瓦当文様の主流へ —

さて、巴文を含めて平安時代後期の瓦文様の多様化傾向は、一定の時期に序々に巴文（三巴）が主流を占めるようになる。現代までもその傾向を踏襲している程に盛行する。これはなぜだろうか。植山茂氏や近藤喬一氏もその点で問題提起をされている。「巴文の瓦は、なぜそれまでの軒丸瓦の主流を占めていた蓮華文にとって替って、十二世紀中頃の時点で出現したのであろうか。」⁽³⁷⁾と近藤氏はいう。その傾向の帰結は巴文、それも概ね三巴文に統一され、主流となっているのである。これは巴文が文様における調和性・製作における経済性・密教思想を体現する思想性を統一した到達点として捉えられるのではないか。ここには、特異な、特殊なものが一般的に

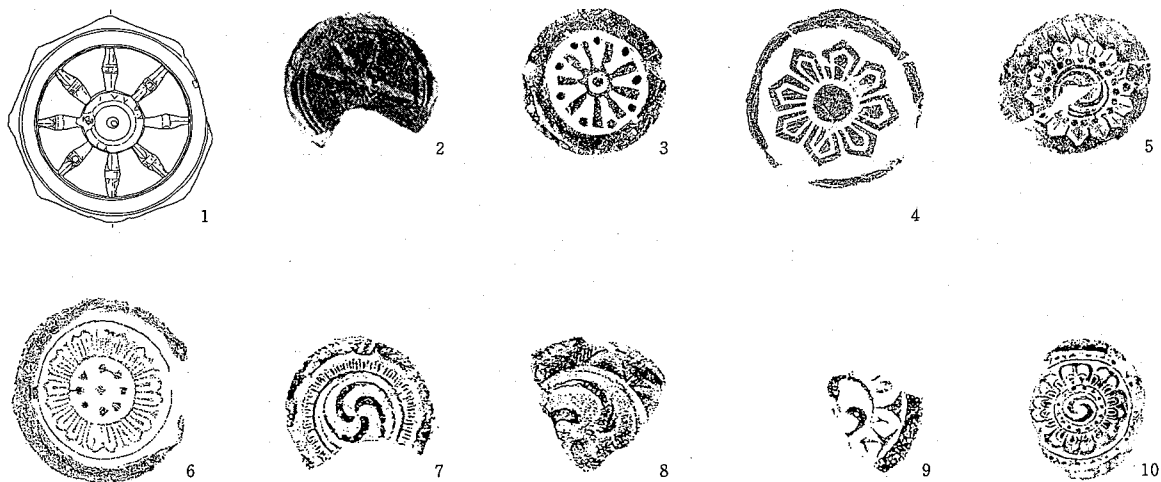


図4 輪法との関連がうかがえる軒瓦など（1は1：8、2～10は1：6）

なっていく過程、すなわち普遍性の獲得を示しているものと考えている。巴文の盛行に関して近藤喬一氏は巴文がその文様において簡略な故に12世紀後半以降盛行したと述べている。それも然りであるが、そこに施工主の「巴文を」という要望があるからこそ巴という文様を選択したはずであり、一般的な簡素化ではなく巴という文様に簡素化を求めたのである。上原真人氏は以下の考察をしている。「軒丸瓦に巴文を早くから採用するのも、単なる文様の伝播というだけの問題ではない。また、以後、巴文が軒丸瓦の瓦当文様の主流を占めるのも偶然ではない。巴文では製作者、生産地の個性がほとんど現われない。おそらく、生産者の拡散化が招いた瓦当文様不均等化の是正が、巴文の普及を促進したのであろう。」⁽⁴⁰⁾という。

しかし、平安時代後期、巴文が盛行するその中心的理由は、あくまで巴文が密教思想と関連する意匠であったことであろう。そして、なおかつ蓮華文にとって替る文様の調和性、製作の簡略性、またそれに起因する経済性などの比重を増しつつ、中・近世にもその命脈を保のである。要約すれば巴文は密教の思想を体現することを基調として採用され、以降、文様の調和性・簡略さ故に永続したと考えられないだろうか。 (1996年8月15日了)

尚、本稿の作成にあたっては、丹羽基二氏、植山茂氏、岡田保造氏、梶川敏夫氏、杉本宏氏、横内裕人氏、その他(財)京都市埋蔵文化財研究所の多くの方々にご教示いただいた。記して感謝いたします。

註

- (1) 北田栄造『昭和60年度 栗栖野瓦窯跡発掘調査概報』京都市文化観光局 1986年
- (2) 上村和直「平安後期の瓦」『平安京提要』(財)古代学協会・古代学研究所 1994年
- (3) 上村和直・辻裕司『昭和61年度法勝寺跡発掘調査概報』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1987年
- (4) a 木村捷三郎他「法勝寺金堂跡第2次発掘調査概報」『京都市埋蔵文化財調査年次報告』京都市文化観光局文化財保護課 1975年
b (3)に同じ
c 『坂東善平収蔵品目録』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1980年
- (5) (1)に同じ
- (6) 梅原末治他『京都府史跡名勝地調査会第6冊』京都府編 1925年
- (7) a 上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代文化』13・14号 (財)元興寺文化研究所 1978年
b 江谷寛「河内・向山の瓦」『考古学と移住・移動』同志社大学考古学シリーズ2 1985年
- (8) 杉本宏「平等院古瓦の新相」『平安京歴史研究』杉山信三先生米寿記念論集 1993年
- (9) 杉本宏氏の教示による。
- (10) (1)に同じ
- (11) 上村和直「尊勝寺跡」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1993年
- (12) (6)に同じ
- (13) 杉山信三他『尊勝寺跡発掘調査報告』奈良国立文化財研究所 1961年

- (14) 木村捷三郎他『尊勝寺発掘調査概報』 六勝寺研究会 1973年
- (15) 梶川敏夫『昭和59年度埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1987年
- (16) 森下衛「尊勝寺発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報第23冊』 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987年
- (17) 内田好昭他『平成3年度京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- (18) 福山敏男他「円勝寺の発掘調査1971・72年」『仏教芸術82・84号』 1972年
- (19) 上原真人「瀬戸内海を渡って来た瓦」『大阪をめぐる文化の流れ』 帝塚山考古学研究所 1987年
- (20) 中谷雅治「法金剛院境内出土の古瓦」『京都府埋蔵文化財発掘調査概報1970年』 1970年
- (21) 網伸也「成勝寺跡」『平成4年度京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所
- (22) 藤原武二「鳥羽離宮跡昭和41年度発掘調査概要」『昭和42年埋蔵文化財調査概報』 京都府教育委員会 1967年
- (23) a 堀内明博「白川南殿C調査区」『昭和55年度六勝寺跡発掘調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1983年
b 梅川光隆他「白川南殿跡」『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1985年
- (24) 加納敬二「円宗寺跡」『昭和61年度京都市埋蔵文化財概報』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1989年
- (25) 杉山信三他「尊勝寺発掘調査報告」 奈良国立文化財研究所 1961年
- (26) a 「尊勝寺跡発掘調査概報」『京都府遺跡調査報告書第23冊』 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987年
b 木村捷三郎他「六勝寺跡」『六盛西店新築工事に伴う埋蔵文化財調査報告』 六勝寺研究会 1976年
- (27) 杉山信三『醍醐寺境内における埋蔵文化財発掘調査概報』 鳥羽離宮調査研究所 1976年
- (28) 杉本 宏「平等院古瓦の新相」『平安京歴史研究』杉山信三米寿記念論集 1993年
- (29) 例えば、3章の注-3の調査では、巴文は61点中5点ある。その内二巴は4点で、三巴は1点で巴文だけの比率では、それぞれ20%：80%である。極端に二巴の比率が高い。
- (30) 上原真人「平安後期の軒瓦に関する基礎的研究」『考古学論考』小林行雄博士古希記念論集 1982年
- (31) (18) に同じ。P82-E R015の二巴軒瓦。径約16.8cmを測る。Mグループ (15.1cm~17.0cm) に属す。
- (32) (25) に同じ。PL38-114の二巴軒瓦は径15.3cm、PL38-116の二巴軒瓦は径13.8cmを測り、Sグループ (13.0cm以下のもの) には属さない。
- (33) a 木村捷三郎他「尊勝寺跡発掘調査概報」 六勝寺研究会 1973年
b 森下衛「尊勝寺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報第23冊』 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987年
c 梶川敏夫「尊勝寺跡」『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1987年
d 上村和直他「尊勝寺・最勝寺岡崎遺跡」『京都市内遺跡立会調査概報』 京都市文化市民局 1995年度
- (34) 上村和直「尊勝寺跡・岡崎遺跡」『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- (35) 上村和直他「鳥羽第79次」『昭和57年度鳥羽離宮発掘調査概報』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1983年

- (36) 前田義明『栢杜遺跡調査概要』 鳥羽離宮調査京都市埋蔵文化財研究所 1974年
- (37) 沼田頼輔「日本紋章学」 新人物往来社 1979年
- (38) 丹羽基二『チベットの落日』 近藤出版 1988年
- (39) 近藤喬一「瓦からみた平安京」『歴史新書40』 教育社 1985年
- (40) 上原真人 (30) に同じ

図版出典一覧

- 図1 - 1 上村和直他「昭和61年度法勝寺跡調査概報」(財)京都市埋蔵文化財研究所 1987年
 - 2 福山敏男他「円勝寺の発掘調査(下)」仏教芸術第84号 1972年
 - 3 坂東善平「坂東善平収蔵品目録」 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1980年
 - 4 木村捷三郎他「法勝寺金堂第2次発掘調査概報」『京都市埋蔵文化財調査年次報告』 京都市文化観光局 1975年
 - 5 1に同じ
 - 6 上村和直「尊勝寺跡」『1989年度京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年
 - 7 杉本宏「平等院の古瓦の新相」『平安京歴史研究』杉山信三先生米寿記念論集 1993年
 - 8 同上
 - 9 同上
 - 10 同上
 - 11 梅原末治他「京都府史蹟名勝地調査会第6冊」 京都府編 1925年
- 図2 - 1 杉山信三他「尊勝寺跡発掘調査報告」 奈良国立文化財研究所 1961年
 - 2 同上
 - 3 木村捷三郎「尊勝寺発掘調査概報」 六勝寺研究会 1973年
 - 4 - 1 梶川敏夫「1984年度埋蔵文化財調査概要」 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1987年
 - 4 - 2 同上
 - 5 森下衛「尊勝寺発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報第23冊』 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987年
 - 6 同上
- 図3 - 1 関野貞「富貴寺」 「日本古瓦文様史」日本の建築と芸術(上) 岩波書店
 - 2 同上
 - 3 関野貞「出所不明」
 - 4 関野貞「法金剛院」
 - 5 関野貞「當麻寺」
 - 6 樋口隆久他「教王護国寺防災施設工事・発掘調査報告書」 教王護国寺 1981年
 - 7 河原純之「六波羅蜜寺出土の瓦類」『六波羅蜜寺民俗資料緊急調査報告書第二分冊』 (財)元興寺仏教民俗資料研究所 1972年
 - 8 同上
 - 9 丸川義広「最勝寺跡」『平成3年度京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年

- 10 梅原末治他「京都府史跡名勝地調査会第6冊」 京都府編 1925年
- 11 図3-7に同じ
- 図4-1 梅川光隆「平安宮内裏」『昭和60年度平安京発掘調査概報 京都市文化観光局 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1986年
- 2 図3-7に同じ
- 3 辻純一他「高陽院」『昭和56年度平安京跡発掘調査概報』 京都市文化観光局 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1983年
- 4 上村和直他『1986年度法勝寺跡発掘調査概報』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1987年
- 5 堀内明博他「尊勝寺跡・最勝寺跡・岡崎遺跡」『平成6年度京都市内遺跡立会調査概報』 京都市文化市民局 1996年
- 6 3に同じ
- 7 関野貞「御香宮」『日本古瓦文様史』日本の建築と芸術(上) 岩波書店
- 8 同上 「六勝寺」
- 9 木村捷三郎 古瓦収集図録568 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 10 7に同じ「興福寺」